すばらしい一年へ

大東文化第一高等学校／石家庄外国語学校
李　越

光陰矢のごとし。はじめての成田空港、初めてのホームステイ、初めての登校、初めての文化祭、初めての日本でのお正月、初めての体育祭。日本と「さよなら」を言わなければならないときに、過去の一年のことが脳裏に浮かんできて、胸が我慢できないほど痛くなった。その痛みは私の全身を通って、最後空気になって、残ったのは一生忘れられない思い出だった。

最初、あの痛みは心から顔まで来た。目が開けられなくなった。目を閉じたまま、日本に着いたばかりのことが浮かんできた。初めての夕食は確かお台場で食べた。夜のお台場はキラキラと輝いていた。遠くを走る電車も虹よりも眩い橋も私の目に入った。想像もできない東京のにぎわいだった。それから口にした日本料理は思ったよりおいしかった。だんだん、周りからは日本語しか耳に入らなくなった。本当に自分はここで上手く暮らせるのか、少し不安があった。でも時間の流れとともに、日本語にも自信がついた。自分も信じられないほど、今の私は寝言まで日本語を使うようになった。

だんだん、あの痛みは胸まで移ってきた。ところが、胸に感謝の気持ちがいっぱいで痛みが走る隙はまったくない。私のホームステイのお父さん、お母さんたち、兄弟姉妹たち、一人一人が私を支えてくれた。私は四つの家庭でホームステイを経験した。加藤様、村中様、吉田様、岩本様のお世話になった。その中に中国人もいた。私はそれぞれの家庭からいろいろなことを体験してすごく勉強になった。

痛みは四肢まで移動している。左手はだんだんおもくなった。私はたくさんすばらしい先生に出会った。いつも私に優しく微笑んでくれていた。至れり尽くせり面倒を見てくれた。この恩恵は海よりも深く、空よりも広い。右手も温かくなった。それは私の日本の友達からの暖かさだ。私がクラスメートと一緒にいたのは最高な時間だった。昼のお弁当の時間、帰り道、楽しく過ごしていた。たまに帰り道に、焼き鳥屋さんに寄って、おいしい焼き鳥を食べた。焼き鳥屋さんのおじさんは関西人で、とても明るい人だった。はじめて行ったとき関西の飴をもらった。そしていつも私が好きな唐辛子をたっぷりかけてくれた。おじさん、ありがとう。

あの痛みはまた肺に沁みこんだ。一方、私が知っている日本人の中には中国のことを良く知っている人もいれば、あまり知らない人も恐らくいると思う。「中国の電車は蒸気機関車ですか」とか、「中国はデパートがありますか」とか、よく聞かれていた。中国のことはオリンピック大会だけでは日本人に十分伝わったとは思えない。日中両国間の交流はもっともっと必要である。もちろん、わたしは自分の力で日本のことを知らない中国人に正直に伝えたいと思う。

長くも短くもない一年。でも確かに私は成長していた。私は蚕のように、いろいろ経験して、ようやく抑えられない痛みを我慢して、いよいよ蝶々になる。いつか私は立派な蝶になって、日中両国の間に、赤い糸をつなぎたい。

日本、今日でさよなら。
また会う日まで。